

# Kumamoto Artpolis News 2007 vol.33



くまもとアートポリス設計競技2007  
モクバN2第3回公開審査応募作品(180作品)

●発行 くまもとアートポリス事務局(熊本県土木部建築課内)  
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1  
TEL096-333-2537 FAX096-384-9820  
素敵な建物を建築したいとお考えの市町村や民間企業の皆様。くまもとアートポリスでは国内外から優れた建築家をご紹介しますので、いつでもご相談ください。

くまもとアートポリスの情報盛りだくさん。ホームページはこちら。  
<http://www.pref.kumamoto.jp/traffic/artpolis/index.html>

19 土 建  
③ 001



くまもとアートポリスニュース第33号  
2008年3月発行

平成19年11月17日(土)熊本市の熊本市青年会館において公開プロポーザルが行われた。8名の建築家がそれぞれ熊本のイメージを交えながら駅前広場を提案。厳正な審査の結果、最優秀者として西沢立衛氏(東京都)、次点としてクライン・ダイサムアーキテクト(東京都)が選出された

最優秀者の提案内容について、審査委員長の伊東豊雄氏は、「空に浮かぶ雲」のようなイメージの広場が、爽やかでありながらも強いインパクトがあり、他の駅にはない熊本独自の空間となりうる。形態上も非常にフレキシブルでありこれから様々な難しい状況に直面しても作品が持つ魅力を失うことなく柔軟に対応が可能。また、床面をすべてフラットにし熊本県が推進するユニバーサルデザインにも適応している。」と評価。

一方、次点については、「からし蓮根の断面の持っている花のようなパターンの中にデザインの楽しさや明るさなど、駅前広場にとって重要な要素がたくさん盛り込まれており、提案者が受け答えする言葉の全てに建築に対する情熱と人間に対する優しさがあふれていた。」と評価した。

最後に伊東氏は、「管理上の問題や安全性などが重視される現在の建築過程の中で見落とされがちな一人の人間としてここを利用するときの楽しさ、駅に対する人間らしさみたいなものをどんなふうに求めていくかということは非常に重要なこと」とコメントし、今回のプロポーザルを締めくくった。

熊本駅東口駅前広場は平成23年に暫定型の完成、平成30年に最終的に完成する。

審査委員



会場

■ 紀彦氏(株) 紀彦建築設計事務所(東京都)

今回の計画は、バラバラになりかねない様々な要素をいかに統合するかが重要と考え、いくつかの楕円、双曲線、放物線、いくつかの幾何学、全体の構造物が「地」になるような形で全体を統合していくという考え方で広場のデザインを行いたい。



■ 今坂晋典氏(株) ライト設計(熊本県)

熊本の文化と歴史資産の保存、活気と活力に満ちた熊本活力空間としたい。施設デザインは、熊本城をモチーフとしてUDや環境に配慮したデザインとし、歩道橋の上屋のデザインはイチヨウの葉をイメージした。



次点  
クライン氏及びダイサム氏  
クライン・ダイサムアーキテクト(東京都)



花びらのようにもみえるため、歩道橋や広場の屋根、床、照明、サインなどのデザインとしても展開していけば明るく楽しい、ひとがたまりやすい広場となり、熊本の街のパワーを担っていくものとなるのではないかと。

次点

駅から出た時の第一印象、「熊本に着いた」という感じや「街の顔」が大事であり、そのためには個性が必要だと考えた。わかりやすく、覚えやすい、オブジェのような、彫刻のようなもの、かつ大胆なイメージを創るために、広場の歩道橋を熊本の特産品である「辛子レンコン」をモチーフとするストレートなチューブとした。レンコンスライスのモチーフは黄色い

くまもとアートポリスプロポーザル公開審査  
「熊本駅前広場」をデザインする

熊本駅東口駅前広場及び関連施設整備



最優秀者



西沢立衛氏  
西沢立衛建築設計事務所(東京都)

熊本の気候は日差しが強く雨も強い。そこで、屋根を駅前広場にかけることで快適でさわやかな空間を作りつつ、ゆったりと青空に浮かぶ「大きな雲」のようなものを熊本の新しい玄関口として考えた。各々の屋根は機能的な部分を覆い独立した用途・機能を持ちながらも広場空間は全体として連続し、人々の憩いの場所あるいは小さな公園のようなパブリックスペースとすることで、車や人だけでなく、ストリートパフォーマンスやストリートファニチャー、緑などが緩やかに融合する空間となる。床面は段差を設けず、全体として連続したフラットな空間としたい。

屋根下広場の空間イメージ



■ 南孝雄氏(株) 産総設計(熊本県)

熊本の資産というテーマで阿蘇の「火」、森の都の「緑」、水の都の「水」、熊本城などに代表される「石」、熊本の人々の優しさの「優」という5つのキーワードを掲げ、それを形として組み込むことを駅前空間全体のコンセプトとした。



■ 松本積氏(株) マック(熊本県)

広場は周辺の風景画が緑豊かな空間の中に浮かぶようなデザインとし、全体をアールヌーボーの曲線的なデザインで統一することで、「ゆっくりとした時の流れの中」を感じさせる空間として、誰もが心の安らぎを感じるやさしいデザインとしたい。



■ 小泉雅生氏(有) 小泉アトリエ(神奈川県)

駅前広場では、人や車の流れを確保しつつ居場所となるような領域感を生み出すことが重要と考え、熊本城の地蔵石のように、バス広場やタクシー広場等の異なる性格の小さな広場が次々とつながっていく、小さな広場の集合体を提案したい。



■ 満石安雄氏(株) ジメント(熊本県)

熊本の文化及び県民性「簡素・善良・素朴の精神」から思い至る「加藤清正」を本計画のテーマにすえ、熊本城のように白と黒を基調とした簡素・明快さを目指し、魅力的で賑わいのある緑と出会いと交流の空間「出会いの景」を構成したい。



# くまもとアートポリス設計競技2007 モクバンR2



モクバンR2 第3回(最終)公開審査

ここにしか存在しないような建築、これを造りたいんだという気持ち、何のために建築するのかという強い思いが何よりも大切ではないか



最小限のバンガロー空間を題材とした時代を切り拓く新たな木造建築へのチャレンジ。そこでは新たな木材使用の発想だけでなく、それを確実に現実化するための強固な意志と責任感そしてそれを支える明確な技術的裏付けが必要であった。

「モクバンR2」は球磨村森林組合が球泉洞休暇村に建設する木造バンガロー(モクバン)のデザインコンペティションで、今回はその第2弾(ラウンド2)である。  
「学びつつ創る、創りつつ育む」というアートポリスのメッセージのもと、海外を含む全国から延べ566点もの応募があった。このコンペは、単なる一過性のコンテストではなく、競い合いながら学ぶという『競学』の場の創造を目指し、作品募集と公開審査を3段階設け、なおかつ出席を必須条件とするユニークな審査方法が特徴である。  
公開審査では、各作品についての審査員の指摘や意見交換が行なわれた後、次回の審査に進む作品が選ばれる。また、審査終了後には応募者が「どこが良くなかったか」「どうすればもっと良い作品になるか」などの疑問を審査員に直接ぶつける機会が設けられた。したがって勝ち進んだ設計者も、落選した設計者も、公開審査で指摘された点や課題をさらに改善し

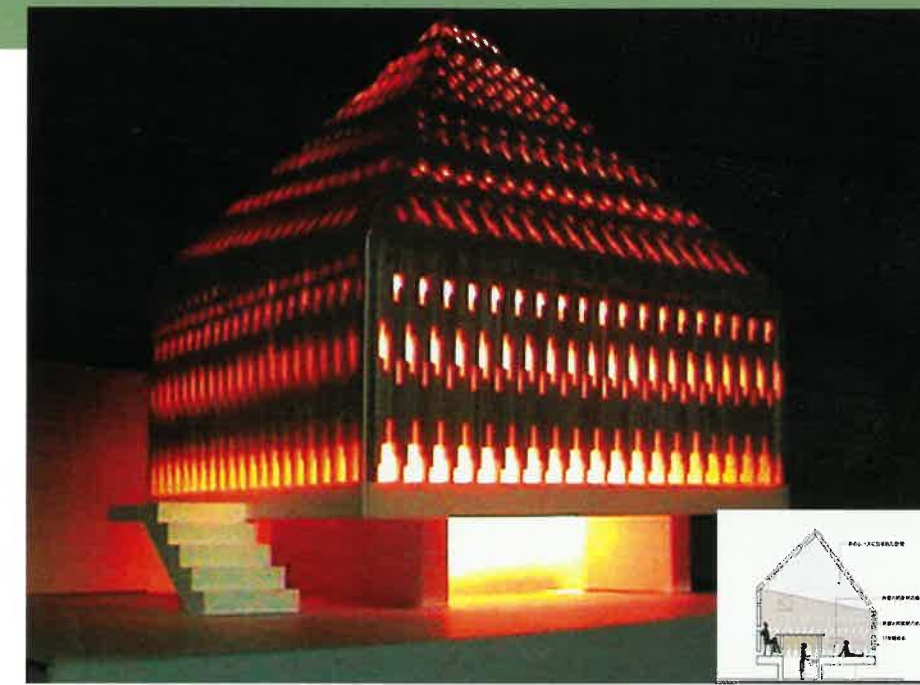
て次回の審査に臨むことができ、作品はどんどん磨かれたものになっていった。  
第3回の最終審査では、17名のプレゼンテーションが行なわれた後、白熱したディスカッションが展開され、設計案のみならず、応募者の熱意や責任感、モチベーションを問うような厳しい質問も多く投げかけられた。新しい木造建築の可能性をはじめ、その現実性やリスクなどが慎重に検討された結果、第1回審査から勝ち残ってきた「Wooden Lace」(渡瀬正記氏・永吉歩氏/東京都)が最優秀賞に決定した。  
総合講評で伊東審査委員長は、「コンペは並大抵で勝ち残れるものではない。1回目、2回目と積み上げてきた応募者の方が『厚み』があり、またスタディの成果が確実に現れていることを痛感した。このように大いに盛り上がり、『競学』の場にもなり、コンペは成功したと思う」と10ヶ月間という非常に長くてハードなコンペティションを振り返り、締めくくった。



## 最優秀賞: Wooden Lace

渡瀬 正記氏・永吉 歩氏/東京都

タイトルが表すように、角材を編んだような意匠のバンガロー。一貫してはっきりとしたコンセプトが感じられ、木の魅力を活かした工芸的な美しさを持つプロポーショナルをはじめ、風雨対策や木材の耐久性、メンテナンスといった、これから直面するであろう様々な現実問題を十分解決できるというプロフェッショナルな建築家としての信頼感が高く評価された。



左:永吉 歩氏 右:渡瀬 正記氏

最優秀賞に「Wooden Lace」が選ばれて、本当に良かったと思っています。本当に綺麗です。この綺麗なバンガローが建つことで木造建築の魅力が再発見され、木材の需要拡大に繋がっていただければ本当に最高の幸せです。これから関係者の皆さんと一緒に最高のものをつくりあげていきたいと思っています。

## 優秀賞: 木衣—キゴロモ—

宗本 晋作氏 小川 昂人氏  
村上 美美子氏 堀 賢太氏  
満田 衛貴氏/京都府

木でありながら、布のようなイメージを持つテント状のバンガロー。応募作品中、最も斬新な技術的提案をしている作品として高く評価された。



## 優秀賞: table hut

高池 葉子氏/東京都



帽子のような可愛らしいイメージを持つバンガロー。斬新な技術的提案をしている点が高く評価された。

## 球磨村森林組合長賞受賞6作品

 <p>小さくて大きなモクバン 川崎 賢介氏(熊本県)</p>	 <p>roots of tree 永岡 広太郎氏 阿部 悠子氏 栗 拓郎氏(熊本県)</p>	 <p>ネスト・テント・ハウス 堀内 葉子氏(東京都)</p>
 <p>Hammock house 中村 伸二氏 井坪 和貴氏 植方 志保氏 甲斐 悠博氏 白谷 孝氏 西川 勇紀氏 本田 京隆氏 松井 一生氏 吉代 舞之氏 小八重 守氏 大黒 高俊氏(熊本県)</p>	 <p>KOYA-URA house 平野 吉浩氏(熊本県)</p>	 <p>KUMAHUTS 南 政定氏 林 真弓氏(並賀県)</p>

# 宇土市立宇土小学校・網津小学校 プロポーザル公開審査

## 子どもの目線で提案する学校づくり

くまもとアートポリス事業に参加して改築する宇土小学校と網津小学校のプロポーザル公開審査が平成20年2月23日(土)宇土市保健センターにおいて開催された。

応募があった66名の中から書類選考の1次審査で各学校5名が選ばれ、2次の公開審査のプレゼンテーションに臨んだ。プレゼンテーションでは、発表者それぞれの学校に対する考え方を反映した様々な提案が展開され、参加した関係者をはじめ一般市民や建築を学ぶ学生ら約300人が熱心に聞き入った。

プロポーザルにおける設計者選定の基準となったのは3つの視点。第1に学校のコンセプト。どのような学校を理想とするか。第2に学校にとって最も重要な場所となる「教室」の考え方。どのような教室の使い方を提案しているか。第3に現校舎から建て替え時のスムーズな移行の問題など、多方面にわたる諸問題の解決。特に第2の視点は非常に大きなポイントとなった。

この3つの視点により審査委員による慎重な審査が行われた結果、宇土小学校の設計者に小嶋一浩氏、網津小学校の設計者に坂本一成氏がそれぞれ選定された。



### 宇土小学校

「子どもたちが生き生きして元気の良い  
学校がいい学校ではないか」



#### 講評

コンパクト、かつ、大きな広がりがあり、全体構成が非常に確かであることが一番の評価。その他、教室のレイアウトの仕方として、教室の壁をL型に配置してコーナーを作りつつ、外に向かって広がりのある多様な学習活動の展開を可能とする新たな教室のタイプ「宇土タイプ」の提案が非常に信頼できるものであること、体育館を校舎中央に配し、体育館自体も大きな教室として捉え、その用途の可能性を広げているところが特徴的であること、質疑に対する応答の仕方に学校に対するはっきりとした考え方が提案されていたことなどが評価された。



株式会社シーラカンズアンドアソシエイツ  
小嶋一浩氏(東京都) (写真右)

学校というのは、建物がいいから素晴らしいというわけではない。あくまでも子どもたちが生き生きして元気の良い学校がいい学校。そのための支援としてこの学校の設計を考え、雑木林の木陰に教室が滑り込んだような限りなく外に近い伸びやかな学校をイメージし、L型の壁をもつ教室で構成されるオープンスクールを進化させた全く新しい「宇土タイプ」を提案したい。



ヨコミゾ・山中・小野田共同設計企業体  
横溝真氏(東京都)

原っぱの一角に教室をおいたような、低くやわらかく周辺の環境と溶け合う学校をイメージ。すべての子供が自分の居場所を持つすべての学年と交流がもてるような、校庭をやわらかく包み輪っか状の校舎を提案。



株式会社SDA 建築設計事務所  
牧野裕三氏(熊本県)

①安心して過ごせる②学年をこえた交流ができる③色々な授業が色々な場所で受けられる④地域のイベントが活発に行われる⑤地域のシンボルとなる、の5つの要素が実現できるような楽しい学校を提案。



株式会社スタジオ建築計画  
元倉真琴氏(東京都)

学校を周辺のオープンスペースと結びつけた連続状公園として位置づけ、丘の上に小学校があり、雲のようなシェルターが優しく覆っているようなイメージのランドスケープ的な学校を提案。



シーラカンズケイアンドエイチ株式会社  
堀場弘氏(東京都)

気候としての建築を提案。一般的な箱状の建築ではなく、樹木の下が学校であるようなイメージで、光・風・熱の濃淡を作り、活動のフィールドが自然にできていくような学校とする。

### 網津小学校

「学校は子どもたちの第二の家であり、地域住民の家でもある」



#### 講評

学校を第二の家と位置づける「大きな庇の家」というタイトルにうまく表現されるように、比較的小規模なヒューマンスケールの学校というコンパクトな提案の中に優しさをうまく表現したこと、具体的にはヴォールト(かまぼこ型の屋根)が連続した美しいプロポーザルの屋根のある提案が子ども達にとっても親しまれやすく、温かみのある小学校になると思われることが一番の評価。また、教室のレイアウト等のプランは非常に端正でありながらも変化に富んだ空間となっており多様な活動が可能であること、エコロジーに関しても独自の提案を行っていること等が評価された。



株式会社アトリエ・アンド・アイ  
坂本一成氏(東京都) (写真中央)

学校は、児童にとっては学びの場であり社会的な家、地域の人々にとっては地域社会の家となる。大きな庇(ひさし)の下の半外部空間や縁側スペースは、学校や地域のインターフェイスとして多様に利用され地域の核として機能することを想定している。宇土の豊かな田園風景に溶け込むイメージで、連続するヴォールト天井からなる「大きな庇の家」のような学校を提案したい。



有限会社小泉アトリエ  
小泉雅生氏(神奈川県)

屋根を切り込んで、周辺の施設や運動場を結ぶ通路をつくり、回遊性を持たせた行き止まりのない小さな集落のような学校を提案。特別教室をクロース、普通教室をオープンにして分散配置し、様々な授業形態に対応させる。



有限会社千葉学建築計画事務所  
千葉学氏(東京都)

全く新しい空間ではなく、現在の網津小が持つ心地よいスケールを何らかの形で継承したいと考え、ヒトデのようにくびれた形の校舎を提案。伸びやかに連なる普通教室群に特別教室がくっついたり時には離れたりして全体に配置する。



村上徹建築設計事務所  
村上徹氏(広島県)

楽しい学校をイメージし、第二の体育館ともいえる大きなホールを中心に配置した校舎を提案。中央のホールを取り囲むように2層で普通教室を配置し、4角は地域との交流スペースにもなるよう特別教室を配置する。



株式会社環・設計工房  
鮎川透氏(福岡県)

人・地域・心を「つなぐ」ことをキーワードに、基本的には中央に中庭を配置した大きなワンルームのような学校を提案。網津小フォーラムという平土間の空間、本の広場、石(馬門石)の庭の3つの要素を持ったこの中庭を囲むように、8の字の行き止まりのない廊下で各教室をつないでいく。

## くまもとアートポリスへの参加について 宇土市長インタビュー

学校改築については、宇土小と網津小の耐震診断をした結果、全面的に建て替えなければならないという結論がでたことがきっかけでした。予算も少なく、早くとりかからねばならなかったときに、県から、「アートポリス事業で建ててみては」という提案がありました。すでに宇土市では宇土マリナをアートポリス事業で建設した経験もあったので、今回この2つの小学校もアートポリス事業で建てるこ



宇土市長  
田口信夫氏

とにしました。県の全面的な支援のお陰で全国から66社もの一流の建築家の方からの応募があり、このような反響に驚きました。こんなに多くの建築家の方々に宇土に来ていただいて大変感謝しています。宇土市は平成20年で市制50周年を迎えますが、記念事業の中でこの2つの小学校のアートポリス事業が一番の記念になるのではないかと思います。児童、保護者だけでなく地域の方々も非常に期待していらっしゃいますが、期待以上の素晴らしい小学校になるのではないかと楽しみです。

建築文化の向上とくまもとアートポリスの普及を目的とし、県内の優れた建造物に贈られる「くまもとアートポリス推進賞」。13回目を迎えるその表彰式と受賞者・選考委員との座談会が平成20年2月1日(金)熊本市青年会館において開催され、関係者や学生など約120人が参加した。

今回、くまもとアートポリス推進賞5作品、くまもとアートポリス推進賞選賞2作品が選出され、第1回からの受賞作品は総計77作品となった。



第13回くまもとアートポリス推進賞受賞作品

くまもとアートポリス推進賞 H-court (八代市)



2階の外壁を外側に傾けた黒い杉板堅羽目の外観。うって変わった大胆な内部空間は、風と光を引き込むプライベートコートを中心に配し、連続する大小高低の外部と半外部と内部が作り出す、空間のリズムが心地よい。また、西日対策にもなっている斜めの壁や、扉の内側に施された可動式のスリット状の風穴など、ディテールに至るまで空調には繊細な工夫が施されていることが評価された。

事業主：林田聖二  
設計者：岩瀬隆広建築設計  
施工者：株式会社米本工務店



施主のオリジナル性の高い生活をイメージし、外と内とのギャップを作りたいと思った。また、敷地のデメリットをメリットにどう換えていくか、空間の流れ、風の引き込みなどを検討した。西日対策として外壁を斜めにしたが意匠的にも成功したと思う。

子ども達が走り回り空間を楽しんでいたことが印象的だった。

設計者：岩瀬隆広建築設計 岩瀬 隆広 氏

くまもとアートポリス推進賞 熊本学園大学14号館(60周年記念会館)(熊本市)



熊本の美術界をリードした洋画家・故海老原喜之助氏によって熊本市新市街の映画館の壁に描かれたモザイク壁画「蝶」。映画館の閉館に伴い建物ごと取り壊される瀬戸際に、設計者が移設を提案し、ぎりぎりのタイミングで実現した。その他、建設中に発見された古代の官道「西海道」の遺構をそのままガラス張りにして保存するなど、古代の歴史、文化の香りを発信する建物になっている。

事業主：学校法人熊本学園  
設計者：野中建築事務所  
施工者：熊谷・小竹・酒井建設工事共同企業体



この60周年記念会館を建てるにあたり、誰もが認める熊本随一の文教地区に相応しいものとして、どういうものを建てるかということが重要であった。大学周辺を毎日登下校する多くの小中学生の目に触れることを意識した。子ども達にはいかに素晴らしい環境で育ったかを将来感じて欲しい。また、大学は従来からUDを研究しており、その研究を活かすいいチャンスにもなった。

事業主：学校法人熊本学園大学 目黒 純一 氏

くまもとアートポリス推進賞 城下町の住宅 (熊本市)



新旧こもも様々なスタイルの家々が雑然と建て込む中で、全体から孤立しようというわけでもなく、調和しようとしているわけでもない、言葉少ないのに愛嬌がある独特なフォルムが秀逸。また室内構成や間仕切りのデザインなどにも建て主と建築家の息のあったストイックさとウィットネスが徹底され、応募作品の中で建築的にはもっとも優れた作品だと評価された。

事業主：下田誠也  
設計者：塩塚隆生アトリエ  
施工者：株式会社建吉組



家の模型を見た時、東南から見た外観が宇土境をイメージさせ気に入った。家造りをとおして、「建築」というものは建築家の哲学或いは情熱の融合からなるものであることを学んだ(事業主 下田 誠也 氏)。

敷地は周辺の家が迫っている密集した住宅地。この敷地で、植物の種が飛んできてその植物が光や風を取り入れ成長していく形を建物にしたかった。この場所ではあり得ないという個別性及び密集した場所での住宅の建て方という普遍性の2つを建築で表現した。

設計者：塩塚隆生アトリエ 塩塚 隆生 氏

第13回くまもとアートポリス推進賞表彰式・座談会

くまもとアートポリス推進賞 多良木町交流館石倉 (多良木町)



昭和10年穀物倉庫として作られた石倉が、地域住民の交流の場と、中心市街地の活性化を図る拠点として再生。床面には子供たちの手による「思い出ガラスチップ」が埋め込まれるなど、随所に地域住民が協力した作品を使い、町ぐるみで様々な業者、人が関わって息を吹き返した。再生の過程で生まれた多くの人々との関わりが、今後の石倉の活用はどう生かされるのか期待が寄せられる。

事業主：多良木町  
設計者：かちやデザイン一級建築士事務所  
施工者：肥後環境株式会社、有限会社鶴田電気設備、成松建設株式会社、株式会社尾前電気設備、河内産業株式会社



もとは農協の米倉。人吉球磨地域にはこのような石倉がたくさんあるが、同じ敷地に石倉が3棟建っているものは珍しい。70年間ずっとほったらかしであったこの石倉を何とか活用できないかと考え、研究会を設立、小中学生からもアンケートを取り、地域住民の交流や話し合いの場など使い方を研究した。施工では子ども達を参加させ、将来、ふるさとに帰ってきた時にまた石倉を訪ねて欲しいという願いを込めた。

事業主：多良木町 松崎 信幸 氏

くまもとアートポリス推進賞 グリーン、ツイードアンドカンパニーアジア エンジニアリングセンター (合志市)



アメリカの半導体関連部品の研究所で、近い将来に製造部門(工場)も入ることが予定されている。「のこぎり屋根」は、物を製造する工場として相応しい空間を作り出すとともに、研究所やオフィスに安定した北側の自然光を提供している。内部空間では、ほとんどのエレメントが剥きだしであるが、用意周到に考えられた構成と丁寧に取められたディテールが、実に明快で爽やかである。

事業主：グリーン、ツイードアンドカンパニージャパン株式会社  
設計者：荻野アトリエ  
施工者：株式会社建吉組



将来的な工場の増築を念頭におきながら、工場のイメージをいかに現代のものにするか、いかに人間的なスケールでつくるかということテーマとして考えた。施行プロセスはまさに戦いだった。現場の方とお互い主張を交わしながら毎晩遅くまで議論した。建物は引き渡しで完成ではなく、あくまでスタート。設計や工事のプロセスで関わってくる人々とのつきあいが重要だと思う。

設計者：荻野アトリエ 荻野 紀一郎 氏

くまもとアートポリス推進賞選賞 AI mall (熊本市)



熊本市の上通りアーケードから奥まった小道沿いの商業ビル。建物の価値を床面積で測る不動産的資産価値に対し、街やそこを行き交う人々などのような空間を提供するかという、環境的資産価値を重んじた姿勢は評価される。

くまもとアートポリス推進賞選賞 コンパスポイント本社ビル (熊本市)



各部屋から緑や水の流れを楽しむことが出来るなど、訪れた客に快適な非日常時間を提供する仕掛けが随所に見られる。「穏やかに流れる時間、心と体が開放される場所」という目的を具現化しようとした試みを感じられる。

座談会

くまもとアートポリス推進賞を単なる表彰だけにとどめず、事業主や設計者、施工者がこだわりや頑張りを広くアピールし、選考委員がアドバイスをを行う機会を設け、県民の皆さんに建築やデザインをもっと身近なところで楽しんでもらおうと開催した座談会。各受賞作品の事業主、設計者、施工者と選考委員の計22名が参加した。

座談会は選考委員であり熊本日日新聞社地方部長兼論説委員の松尾氏の進行により進められた。

「魅力的な建築、優れた建築とは？」というテーマでは、「住宅については、単に手入れのしやすさ、収納の多さ、熱効率の良さなどで「住まいやすい」ものが魅力的な住宅と考えられがちだが、一人一人のライフスタイルにあって、建物と人の暮らしが融和していくような建物もあっていい。」「周辺の環境をきちっと読み解き、それに自分のものを加えて自分なりの回答を建築で表現したものがいい建築。」「何よりも地元の人たちが大切に、愛している、丁寧にメンテナンスしてでも残そうとしている建築が魅力的な建築。そういうものを一つでも多く残そうとするような気運を醸成していくことが大切ではないか。」など、様々な意見が出された。

最後に、「建築は、施主が気に入ってればそれでいいのか」という問いかけに対し、「例えば、洋服で例えると家の中ではどういうパジャマを着ていても構わないと思うが、表に出て行くときには自分が良ければそれでいいというわけにはいかない。建築というのはどこか、社会に対して、環境に対して「表」にたっている社会的な代物であり、環境や周辺、社会に対して、どういう居住いをしているかということとはとても大切なこと。今回受賞した作品はそういう意味でも非常に優れている」と締めくくられた。

# 藤森流左官指南

藤森流左官仕上げを通して、  
建築づくりの楽しさを体験しよう！

専門家だけでなく、広くいろんな方に実際に体験して、建築の面白さ、楽しさを感じてもらおうと開催される「市民大学」。今回は、平成20年3月21日（金）に合志市にある熊本県立農業大学校学生寮を舞台におこなわれた。この建物は、2000年にくまもとアートポリスプロジェクトで建てられたもの。年月の経過により漆喰の壁の表面を覆っていた「土塗り」が部分的に剥げ落ちてきたため、楽しみながら新たに塗り直し、建築を大切にすることを養おうという試みだ。

当日は、幅広い年齢層の応募者やボランティアの学生など総勢約50名が参加した。作業前のオリエンテーリングでは、設計者の1人である藤森照信氏から、建設中に敷地内で偶然目にした農業用の土を漆喰の壁に塗ることを思いついた経緯などが語られた。今回は、剥げ落ちないように装着のための左官用バンドと土の配合を実験し、色合いもよく、強度も保てる割合で材料が準備された。

実際の左官作業はいたって簡単。材料が分離して濃度が変わらないように時々かき混ぜることに注意しながら、刷毛を用いて横目で壁に塗っていくというもの。お手本を見た後参加者は、刷毛と材料の入った容器を持ってさっそく作業にとりかかり、土塗りに挑戦した。単純な作業とはいえ、参加者それぞれの刷毛のタッチには微妙な差があり、一見バラバラ。それでも、藤森氏の「それぞれ違っていても、そこがいい」というおおらかなアドバイスを、参加者は楽しそうにのびのびと作業を続けていた。

昼食をはさんで午後は、藤森氏による講演。この学生寮を設計する際の工夫した点やエピソードなどが語られたほか、「人体からうぶ毛がはえているように、建物から植物がはえている状態」を建築の理想とする藤森氏のこれまでの作品や研究も紹介。茅葺きの頂上に花が植えられている「芝棟（しばむね）」の歴史や分布にはじまり、壁から屋根にタンポポを植えた「タンポポ・ハウス」や「ニラ・ハウス」など、自然素材を大胆かつ豊富に使った独特の藤森ワールドに引き込まれ、参加者は熱心に聞き入っていた。



今回の市民大学の舞台となった熊本県立農業大学校学生寮（熊本県合志市）  
2000年3月竣工。



設計者 藤森 照信氏



### 参加者の感想

村上 勇樹 くん  
(中学3年生)

塗る面積が広くて、途中で疲れたけど、面白かったです。楽しく作業できましたが、適度なムラがあったほうがいいと言われ、ムラを作るのが結構難しかったです。またこのようなイベントがあれば、参加したいと思います。



### 参加者の感想

武末 夏子 さん  
(設計事務所勤務)

テレビ番組でちょうど左官職人の紹介を見ていたので、興味を持って今回は参加しました。土塗りは初めてでしたが、とても楽しかったです。また素材も土なので、心が休まるような優しい感じがとっていいですね。建築を見る機会はよくありますが、実際に作業する機会は少ないので、このようなイベントはもっと開催して欲しいと思います。



## 新規プロジェクト紹介 「地域資源活用総合交流促進施設」(芦北町)

- 設計者：高橋晶子+高橋寛(ワークステーション)
- 建設場所：葦北郡芦北町大字花岡1705-1他
- 延床面積：1,386㎡
- 構造・階数：鉄筋コンクリート+木造 地上1階
- 竣工予定：平成20年11月末



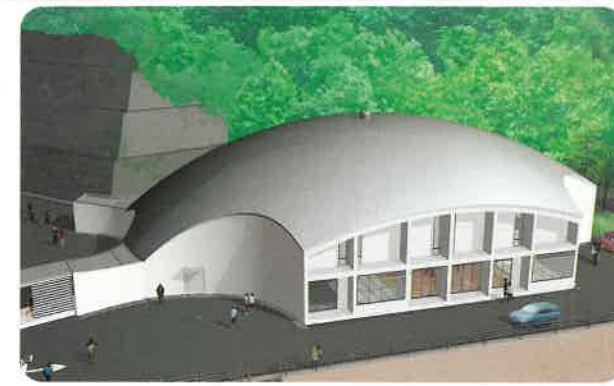
高橋 晶子氏



高橋 寛氏

### プロフィール

高知県立坂本龍馬記念館をはじめ、数多くの公共建築を手がけている建築家ユニット。地域との対話を基にした丁寧な設計プロセスに定評がある。



【外観】



【内観】

地域資源活用総合交流促進施設は、都市と農村との交流促進を図る拠点施設として計画、設計された。外観は、不知火海のシンボルで芦北町の観光名物である「うたせ舟」が風を受け帆を張るイメージ。屋根はドーム形状、平面輪郭は不定形とされ、隣接するしろやまスカイドームとともに周囲から見える二つの建物がばらばらな印象とならないこと及び新設建築の特徴を出すことの両立が試みられた。一方、施設内は大空間の体験交流室を中心に研修室、調理室などが設けられ、凹形にカーブした特徴的な輪郭が作り出されている。ドームの大屋根の構造は、県産材の杉集成材を竹かご状に編むという海外においても希少な先駆的木造の試みがなされている。

## 事業開始から20年。くまもとアートポリス成人式を迎える!!

近年、くまもとアートポリスに多くの視察者が訪れている。平成19年度に県アートポリス事務局が案内した海外からの視察者数は過去最高の572人を記録。特に韓国からの視察者は、韓国の国会議員を代表とする視察団（韓国国会公共デザイン文化フォーラム）や韓国の国家機関である文化観光部の上級官僚などトップレベルの政治・行政関係者をはじめ、韓国主要テレビ局であるMBC放送、KBS放送のほか、京畿道CATVなどの取材が相次いだ。また、韓国文化観光部や韓国の建築団体からは、くまもとアートポリスを都市建築デザインのケーススタディとするため、国際シンポジウムにも招聘された。

一方国内では、地元経済誌「くまもと経済」に、くまもとアートポリスの再発見が緊急の課題として取り上げられ、またスカイネットアジア航空の機内誌では特集記事が掲載されるなど、くまもとアートポリスの成果は着実に広がりつつある。



韓国国会公共デザイン文化フォーラム視察団の視察の様相



韓国主要テレビ局の取材の様相



地元経済誌「くまもと経済別冊 ESPRESSO[エスプレッソ] 創刊号」での紹介

### くまもとアートポリスへの海外からの視察者数の推移（県建築課案内者のみ）

